

「金色の風」導入に向けた体制づくり

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

実需者ニーズに即した主食用米産地の形成

■ ねらい

一関地方における主食用米の作付面積は「ひとめぼれ」が95%を占めているが、近年は販売面で厳しい状況にある。また、当地方における稲作部会等の組織活動の活性化が求められる中で、県オリジナル新品種「金色の風」がデビューし、平成29年産から本格的な取り組みが始まる。そこで、「金色の風」により活力ある米づくりと米産地としての地位の確立するため、関係機関連携による推進体制を整備するとともに、栽培研究会の発足を目指した。

■ 活動対象

J Aいわて平泉「金色の風」栽培研究会

■ 活動経過

(1) 一関地方水田営農推進ワーキンググループ（WG）による新品種の推進体制の検討

ア 産地計画作成支援

(ア) 「金色の風」作付地、作付候補者の要件の検討

(イ) 食味向上に向けた取組の検討

(2) 現地試験の支援

(ア) 試験場所：一関市第1遊水地

(イ) 支援内容：農業研究センターが設置した現地試験圃の調査区設置、生育ステージの確認、栽培管理指導を実施した。



「金色の風」栽培候補者説明会（H27.1.12）
他ブランド米との比較試食中

(3) 栽培研究会設立支援

ア 設立までの経緯

(ア) 作付農家の選定：WG会議において、産地計画に掲げる要件に基づき、33名の農家を選定した。

(イ) 説明会（1月12日）：作付候補農家のうち22名が出席した。農協が産地計画、普及は栽培方法、種苗法について説明した。また、試食会も開催し、他ブランド米と比較検討した。

(ウ) 準備会（1月31日）：作付農家13名、栽培適地実証農家2名の計15名に決定し、設立総会に向けて研究会規約や役員候補を検討した。

(エ) 設立総会（2月22日）：作付農家に登録証を交付し、栽培研修会を開催した。

イ 活動支援

(ア) 生産モデル実証圃及び栽培適地実証圃の設置計画策定

生産モデル実証圃を中里、花泉の2ヶ所、栽培適地実証圃を厳美、川崎町、藤沢町の3ヶ所に設置することになった。調査は研究会と管轄のJA営農経済センターが担う。

(イ) 施肥実証試験圃の設置計画策定

一関管内における「金色の風」の施肥体系を明らかにし、地域版栽培マニュアルを策定するため、第1遊水地と巖美の2ヶ所に設置することとした。

(ウ) 研究会の開催

第1回目の研究会において、栽培のポイント等について指導し、今後の活動についても協議する。

■ 活動成果

(1) 栽培研究会設立支援の結果

ア JAいわて平泉「金色の風」栽培研究会の発足

(ア) 産地計画の作付候補者を「意欲ある若手担い手を優先する」ことが評価、21ha分の種子が配分された。

(イ) 役員に若い農業者2名が選出。

(ウ) 作付農家は「選ばれた」という意識から高品質米生産に意欲的である。

イ 「金色の風」推進体制の確立

(ア) WGにおいて検討を重ねた結果、農協、市町、県機関の連携により「金色の風」の導入を推進し、研究会を支援する体制ができた。

(イ) 設立準備からJA営農経済センターが積極的に取り組み、農協全体で推進する体制ができた。

(2) 作付開始に向けて

ア 栽培方法の指導

(ア) 農家は初めての栽培に不安を抱いていたが、一関や他の現地試験における施肥方法と収量・品質の関係を示した結果、施肥量を抑え、品質重視の栽培をすることで納得した。

(イ) 研究会において農家から栽培管理記録簿の提案がなされ、様式を作成した。

イ 育苗センターによる苗配布

異品種混入や種子の譲渡を防ぐため育苗センターで一括育苗管理することとした。



高品質・良食味米となるような栽培方法の確立に向けて、「金色の風」栽培研究会の活動を進めていきたいと思っております。

「金色の風」を一関地域の新ブランドとして定着するよう努力し、売れる米づくりを目指してまいります。

所属職名：JAいわて平泉「金色の風」栽培研究会 会長 氏名：小野正一

■ 協働した機関

一関地方水田営農推進ワーキンググループ（一関市、平泉町、JAいわて平泉、一関農林振興センター、一関農村整備センター）

■ 一関農業改良普及センター

水田営農推進チーム（チームリーダー：佐藤千秋、チーム員：大友英嗣、佐藤拓也）

執筆者：佐藤千秋

きゅうり部会の部会活動活性化支援

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

生産部会との協働による果菜産地の強化

■ ねらい

いわて平泉農業協同組合きゅうり部会（以下、部会）は、農協合併に伴い旧いわい東農業協同組合きゅうり部会と旧岩手南農業協同組合きゅうり生産部会が統合し、平成27年1月27日に誕生した。統合により、県内でもめずらしい3つの作型（施設（促成、抑制）、露地）がある4～12月までの長期出荷が可能な産地となった。

しかし、旧JA単位での支部（以下、東西支部）活動は続いているが、旧JA単位や作型を越えた交流、部会全体や役員会の活動などの部会活動の活性化が課題であった。

そこで、部会統合を機に、部会活動の活性化の取組みを協働機関とともに支援する。

■ 活動対象

いわて平泉農業協同組合きゅうり部会

■ 活動経過

(1) これまでの活動経過（平成26～27年度）

平成26年度は、部会統合に向けた支援を協働機関とともに行った。平成27年度は、部会統合後、初年度の活動となったが、部会役員会では、まだ、東・西支部の違いをお互いに理解することに精一杯で、部会の全体活動まで考えることが難しかった。

そこで、お互いの理解を深めるため、役員で作型の異なるお互いの圃場を見ることから始めた。また、役員研修を開催し、産地診断を行って部会の新たな目標と計画を立てるきっかけづくりを行った。その結果、部会の3カ年計画（園芸産地拡大実践プラン）を策定し、総会で承認を得て、次年度、新たな事項（東・西支部交流、作型別生産者交流、県外研修、部会目標の設定、防除資料の作成等）に取り組むこととなった。



役員東西交流



役員研修（産地診断）

実践プラン

(2) 平成28年度の取組

ア 東・西支部、作型別の生産者交流

統合後初となる東・西支部合同の実績検討会や作型別の交流会を開催し、生産者の交流を図った。

イ 役員会の活性化

昨年度に引き続き、役員による研修を開催した。今年度は、県外のきゅうり大規模経営体や種苗メーカーを視察研修した。

ウ 部会目標の設定

部会のスローガンを作成し、部会や作型別の具体的な目標設定することで、部会活動の活性化を図った。

エ 指導会、勉強会等の充実

指導会を計画的に開催し、適期に情報提供できるよう努めた。また、作型別の勉強会を開催し、通常の指導会よりも具体的な内容について学んだ。

オ 情報の提供と共有

部会情報（きゅうり通信）の発行を支援し、部会活動や栽培管理、市況等の情報を部会員に適宜提供した。また、JAと普及のきゅうり担当者で、定期的に打合せを開催し、情報共有と部会活動進捗状況の確認、スケジュール調整等を行った。



作型別勉強会



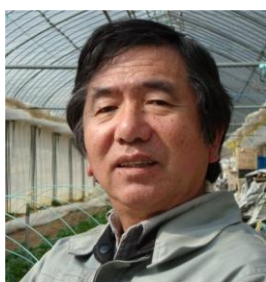
役員先進地研修



東西合同の実績検討会

■ 活動成果

- (1) 東・西支部や作型別の交流により、お互いの栽培環境の違いや共通点を理解し、「同じきゅうり生産者」としての仲間意識が醸成された。
- (2) 役員会では、支部ごとではなく部会全体を捉えた議論ができるようになった。
- (3) 部会として、販売額3億円、部会全体による県外研修などの目標を立て、一人一人の増収運動などを行った。相次ぐ台風等により達成することはできなかったものの、目標を設定して取り組んだことにより、部会活動が活性化された。
- (4) 関係機関と部会が協力し、指導会や作型別勉強会の開催、病虫害診断資料の作成をすることができた。
- (5) 担当者の打ち合わせを定期的に行ったことで、円滑な部会活動の実施を支援することができた。



部会統合後、初めての部会役員研修で産地診断を行い、部会のスローガン『きゅうり栽培っていいね！と誰もが誇れる産地を目指して』と3ヵ年計画を立てました。今年度は、その初年度として、これまでにない取り組みにチャレンジしました。残念ながら目標の販売額には届きませんでした。部会活動の達成感が得られたことが何よりも成果です。まだまだ部会として取り組めることがあるので、関係機関の協力を得ながら、部会活動を活性化させていきたいと思っております。

所属職名：いわて平泉農業協同組合きゅうり部会 会長 氏名：本田洋一

■ 協働した機関

いわて平泉農業協同組合、いわて平泉農業協同組合きゅうり部会、中央農業改良普及センター 一宮グループ

■ 一関農業改良普及センター

野菜振興チーム（チームリーダー：鴨志田千恵、チーム員：中村久美子、細川健、柴田愛里）
執筆者：細川健

りんどうの産地力向上に向けた普及活動

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

体質の強い花き産地構造の構築

■ ねらい

管内のりんどう栽培は、単収が県平均以下であり生産性が低いことが課題である。この要因として、定植から年数が経っても改植が進んでいないこと、黒斑病などの難防除病害等の発生が上げられる。そこで、計画的な株更新や栽培管理上の課題解決を支援し、単収向上を図る。

■ 活動対象

JAいわて平泉花き部会りんどう生産者 45名

■ 活動経過

(1) 改植の推進に向けた支援

ア 新品種展示ほの設置・調査・情報提供

県農業研究センターが育成した新品種を管内の生産者ほ場で展示栽培・調査し草丈や開花期等の特性を把握した。また、新品種の展示成績を実績検討会時に生産者に周知した。

イ 新品種現地検討会の開催

生産者に実際に生育状況を確認してもらい、新品種の特性等についての理解を深めるため、新品種の展示栽培を行ったほ場において、生産者対象の現地検討会を開催し、導入の推進を図った。

ウ 改植相談会の開催

管内のりんどう全生産者を対象に、JA担当者・普及センター職員との3者による面談形式で改植相談会を開催した。生産者ごとに個票（栽培品種、面積、定植後年数の情報と等階級別の出荷実績を組み合わせたもの）を作成して単収実態を明らかにするとともに、ほ場条件や労力等に合わせた品種構成等を提案し、改植の推進と作付け品種の決定を支援した。

エ 栽培管理チェックシートの実施

全生産者を対象に、チェックシートを活用し今年度の栽培で課題となった病害虫や単収低下要因について聞き取りをおこなった。上述の改植相談会の際に回収し、個別面談の材料としたほか、集計結果を防除暦や指導資料作成の基礎資料として活用した。

(2) 課題解決のための実証ほ等設置・検討会の開催支援

当地域のりんどう栽培上の課題解決に向けて、以下の3つの実証をおこなった。また、実証結果について部会運営委員会や実績検討会において、生産者への周知の徹底を図った。

ア 極早生品種単収向上対策実証

管内で作付けが増加している極早生品種について、欠株の軽減効果が期待できる「2本立ち苗」を定植し、その効果を確認した。

イ 難防除病害等の防除方法探索

管内で発生が多い黒斑病について、薬剤の固着性に優れたパラフィン系展着剤を利用した防除による効果を確認した。

ウ 高温障害（花卉の鉢巻き症状）対策実証

近年の夏季高温の影響によるりんどうの花弁の障害（ハチマキ症状）対して、被害回避効果が期待できる資材を施用し、その効果の確認をおこなった。

■ 活動成果

(1) 改植の推進に向けた支援

一連の取組みにより既存品種から新品種への改植が進み、普及計画の到達目標（りんどう県新品種導入割合（県既存品種）35%）を達成することができた。特に改植相談会についてはJA担当者と連携して実施したことで、産地の現状や今後の産地を見据えた品種の作付け推進など担当者間で認識の共有が図られた。

(2) 課題解決のための実証ほ等設置・検討会の開催支援

各種実証圃の運営・調査等について部会と連携して実施したが、今年度は気象条件等により結果が判然としなかった実証が多く、課題解決に向けた取組みを継続する必要がある。



昨年は全国的な早生系りんどうの前進開花や9月彼岸時期の葉枯れ病や黒斑病の発生により、生産・販売に苦戦した1年でした。

このため、JA部会では昨年の実績検討会の際にグループ討論を実施し、課題解決に向けた取組みを話し合い、今年は品質向上に向けて指導会等の取組みの継続、さらなる県新品種の作付け推進などを行うこととしています。

今後も普及センター・生産者と協力し、地域のりんどう生産振興に取り組んでいきたいと思えます。

所属職名：JAいわて平泉 営農部 園芸課 氏名：吉田成美

■ 協働した機関

JAいわて平泉、JAいわて平泉花き部会

■ 一関農業改良普及センター

花き振興チーム（チームリーダー：志田 たつ子、チーム員：鈴木 翔）

執筆者：鈴木 翔

りんご病害虫発生予察活動体制の構築へ向けた取組

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

県南の特性を活かした果樹産地の確立

■ ねらい

温暖な気象条件の中で取り組まれている一関地方のりんご栽培は、他の地域と比較して病害虫の発生に注意する必要がある。旧 J A いわて南果樹生産部会では、地区ごとに予察員を配置し、りんご農家自ら病害虫の発生状況を観察し、月1回開催される予察員会議で、病害虫の防除対策を検討する体制が整っていた。

平成26年に J A が合併し、J A いわて平泉りんご部会の活動を検討する中で、同様の病害虫発生予察活動を東部地区（旧 J A いわて東管内）でも実施できるかどうか模索することとなった。東部地区の予察活動の主体として、今後のりんご生産を担う若手の担い手が候補としてあげられたが、担い手の中には、これまで病害虫防除に直接的に携わる機会が少なかった人もおり、病害虫の観察方法や発生生態等の基礎知識を習得する必要があった。そこで、病害虫発生予察活動実施のための研修会を J A と普及センターが連携して行った。

■ 活動対象

いわて平泉農業協同組合理んご部会（東部地区担い手4名）

■ 活動経過

(1) J A 担当者と実施方針の打合せ（平成27年度）

4名の担い手を対象者として選定、病害虫の発生予察に必要な知識の習得を目指した研修会を年5回実施するとともに、フェロモントラップによる害虫発生調査を行うこととした。なお、研修会場は、対象者の園地の持ちまわりとした。

(2) 病害虫の発生予察に必要な知識の習得（平成27年度～）

りんごに発生する病害虫の種類を知ること（平成27年度）、病害虫の正しい観察方法を知ること（平成27年度）、病害虫の発生生態を知ること（平成28年度）、病害虫の効果的な防除方法を知ること（平成29年度予定）を目的とした研修を普及センターが講師となって行った。

(3) フェロモントラップによる害虫発生調査（平成27年度～）

対象者の園地にフェロモントラップを設置し、10日おきに対象者自身が調査を行った。調査結果は J A が集計し、研修会時に害虫の発生動向や調査結果の活用方法等について情報交換した。

(4) 研修会場及び対象者の園地における病害虫発生状況や防除対策の検討（平成27年度～）

研修会時に、会場園地における病害虫発生状況の確認、対象者自身の園地での病害虫の発生状況等の報告を基に、普及センターが防除対策を助言した。



初めてのフェロモントラップ調査



研修会場園地で病害虫発生状況を確認

■ 活動成果

- (1) フェロモントラップによる害虫の調査方法が理解され、対象者自身が実施する調査が定着した。
- (2) 同年代の担い手に対象を絞ったことで、相互の情報交換がしやすかった。
- (3) 研修会場を持ちまわりで実施したことで、自園ではみられない病害虫等についての理解が進んだ。



研修会では重点防除の病害虫にスポットをあて、生態や被害・見分け方など、部会の指導会では取り上げきれない詳しい部分についても学べる機会となっており、今まで漠然としていた病害虫被害についての知識を深められるよい機会となっています。

担い手の方々の意見を取り入れながら、さらに有意義な活動に繋げていきたいです。

所属職名：いわて平泉農業協同組合営農部園芸課

氏名：村上廣美

■ 協働した機関

いわて平泉農業協同組合

■ 一関農業改良普及センター

果樹振興チーム（チームリーダー：及川耳呂、チーム員：薄衣麻里子）

執筆者：及川耳呂

公共牧場の機能強化支援

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

体質の強い酪農経営体の育成、体質の強い肉用牛経営体の育成

■ ねらい

高齢化等の影響により管内の牛飼養戸数、飼養頭数はともに減少している。その一方で、規模拡大を目指す頼もしい若手後継者も存在する。

管内には室根高原、須川のJAが管理運営する2つの公共牧場があるが、牧草地除染対応による部分稼働・休牧等の不規則な運営に陥ったこと等不運な状況が重なり、管理運営が弱体化しつつあった。

そこで、公共牧場が地域の担い手農家から本来期待されるべき低コスト化、省力化等の機能を発揮し、拠点施設としての役割を担うことを目指して支援を行うこととした。

■ 活動対象

室根高原牧野および須川牧野の管理運営者、牧場スタッフ及び利用農家等

■ 活動経過

(1) 「公共牧場ハブ機能強化等事業」の導入による機能強化策の検討

課題に合致した目的、趣旨に合う上記補助事業を見つけ、他の関係機関とともに運営管理者であるJAに必要性等を説明し同事業導入を提案した。

機能強化のための拠り所計画となる「一関地域公共牧場ハブ機能強化プラン」（以下プランと略）検討委員会の設立、現状課題の洗い出し、取り組み内容のアイデア出し等を行い、各牧場の機能分担の推進、すなわち各牧野の得意面を活かした牧野別の畜種分離、専門性を高めることを柱とするプランを策定支援した。

(2) プラン取り組み内容の実践

プラン取り組み内容は、①生産性の向上、②管理運営体制の見直し、③収入アップ、④コストダウン、⑤利用者満足度の向上、⑥牧場スタッフ士気の高揚の6大柱とし、23項目の取り組み事項を定め、一覧表形式に見える化、年次スケジュール化し、関係者で意識統一して、着実に実践していくこととした。

■ 活動成果

平成28年度における単年度の取り組み成果は次のとおりである。

(1) 入牧頭数の増加

プランの農家周知にあわせてPR活動を実施したこと等により、前年度対比で日平均110頭の増加となった。

(2) 新規利用者の拡大

同様に新規利用農家は27戸増加した（管外農家1戸を含む）。

(3) 牧野経営収支の改善

赤字経営からの脱却は引き続き課題であるが、須川牧野においては預託頭数の増加等の効果から約900万円の収支改善となった。

(4) 白血陽転率

プランでは10%未満を目標として分離飼養の徹底に取り組むこととしており、平成28年度の陽転率は15%と前年度の36%から大幅に低下した。

(5) 柵上の省力化

牧区隔障物を従来のバラ線からインサルティンバー式の高張力牧柵に改めたところ、放牧準備作業である柵上げの作業時間は従前の10%と大幅省力となり、その結果前年度より2週間早い放牧開始を可能とした。

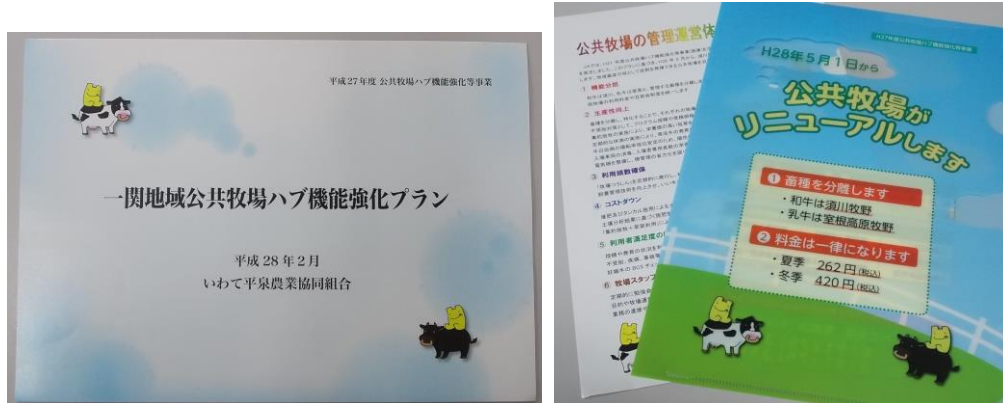


図1 公共牧場ハブ機能強化プラン(冊子・左)と普及啓発資料(右)

| | 取組み | H27年度 | H28年度 | H29年度 | H30年度 | H31年度 | H32年度 |
|------------|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 生産性の向上 | 電気柵整備 | | | ★ | | | |
| | 集約放牧 | | △試行 | ▲部分実施 | ●全面实施 | ○ | ○ |
| | 集畜場整備 | | | ★ | | | |
| | 飲水設備整備 | | | ★ | | | |
| | 牛床マット敷設 | | ● | ○ | | | |
| | 若齢育成牛体測 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 牛白血病分離飼養 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 管理運営体制の見直し | 機能分担(畜種分離) | | ● | | | | |
| | 機能分担(家畜運搬) | | ★ | ★ | ★ | | |
| | 料金等統一 | | ● | | | | |
| 収入アップ | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| コストダウン | 牧場情報誌発行 | ★ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 土壌分析&施肥設計 | ★ | ● | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 土改材散布 | | ★ | ★ | ★ | ○ | ○ |
| | 除草剤散布 | | ★ | ★ | ★ | ○ | ○ |
| | 牧草種子追播 | | ★ | ★ | ★ | ○ | ○ |
| | 草架の整備 | | | ★ | | | |
| | 牧草地の収量調査 | | ● | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 飼料成分分析 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 利用者満足度の向上 | 妊娠牛BCS | | ● | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 利用者アンケート | | ● | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 利用者懇談会等 | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| スタッフ士気の高揚 | スタッフ勉強会 | | ● | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 月例職員会議 | | ● | ○ | ○ | ○ | ○ |

「★」:ハブ事業を活用して実施 「●」:新規に実施 「○」:継続して実施

表1 公共牧場ハブ機能強化プランの取り組み工程表



公共牧場機能強化等事業の活用にあたり、関係機関の皆様には多大な支援を頂き感謝申し上げます。

平成28年は事業の取組み初年度であったが、早速預託頭数の増加等目に見える成果も出はじめており、引き続き解決が必要な課題は多いが今後も地域農家の負託に応えられる牧野を目指し、気を引き締めて取組んで参りたい。

所属職名：いわて平泉農業協同組合 畜産部次長 氏名： 中山淳史

■ 協働した機関

いわて平泉農業協同組合、一関市、一関農林振興センター、県南家畜保健衛生所

■ 一関農業改良普及センター

畜産振興チーム (チームリーダー：多田和幸、チーム員：小川音々、神山沙季)

執筆者：小川音々

地域特性を活かした園芸品目の組合せによる所得向上支援

【大船渡農業改良普及センター】

■ 課題名

地域特性を活かした野菜の振興（冬春等品目の導入・定着支援）

■ ねらい

当管内の基幹品目であるきゅうり、ピーマン、トマトは、土地条件の制約から1戸当たりの作付面積が小さく販売金額が少ない状況となっている。また、大船渡農業協同組合、いわて花巻農業協同組合に産直部会が設立されたが、冬春期の品揃えが不足しており、周年安定出荷が求められている。

そこで、基幹品目と組合せが可能な冬春等品目及び産直向けの冬春等品目の導入拡大及び定着させることによって土地生産性の向上を実現し、当管内における生産者の所得向上を図る。

■ 活動対象

JA生産部会、産直組織等

■ 活動経過

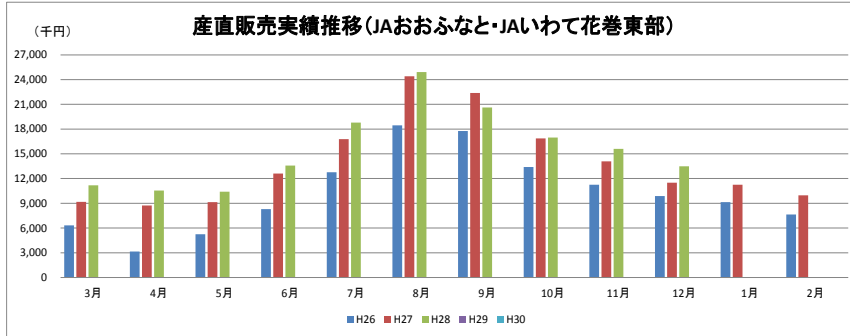
- (1) 冬春等品目実証圃の設置・調査等（H27～H28）
 - ア 有望品目の選定及び栽培マニュアルの作成
 - イ 防除指針への薬剤追加要望及び農薬展示圃の設置（サヤエンドウ、春まきタマネギ）
- (2) 品目組合せ事例の作成（H27～H28）
 - ア 実証結果に基づいた品目組合せ事例の作成・配布（JAおおふなど、JAいわて花巻東部）
 - イ 品目組合せ事例を活用した拡大推進
- (3) 冬春品目等導入拡大支援（H27～H28）
 - ア JA及び農振協が主催する野菜・花き相談会、JA座談会、基幹品目の生産部会の実績検討会及び営農組織の役員会等の場で冬春等品目の導入拡大を推進。（9回：JAおおふなど、JAいわて花巻東部）
- (4) 栽培管理・農薬適正使用指導（H27～H28）
 - ア 各品目の栽培管理指導会（21回：JAおおふなど、JAいわて花巻東部）
 - イ その他、産直組織等からの栽培管理・農薬適正使用指導依頼対応（随時）

■ 活動成果

- (1) 冬春等品目実証圃の設置・調査等（H27～H28）
 - ア 実証・調査結果に基づき有望品目の選定及び栽培マニュアルを作成・配布し、冬春等品目の導入拡大に活用。（6品目）※順次作成・配布中
 - イ 防除指針に新たに薬剤が4剤追加され、平成29年度の防除暦に採用。
- (2) 品目組合せ事例の作成（H27～H28）
 - ア 平成28年度の実証結果に基づいた品目組合せ事例を作成・配布し、冬春等品目の導入拡大に活用。（JAおおふなど、JAいわて花巻東部）
- (3) 冬春品目等導入拡大支援（H27～H28）
 - ア 選定した推進品目は、管内市町で産地交付金の対象となるよう誘導し、市町とJAが連携して推進できる仕組みが作られた。

イ 年々、冬春等品目の導入農家数、作付面積及び販売金額が増加傾向にあるとともに、産直の園芸販売額が増加し、冬春期の販売額も向上。

- ・ 冬春等品目系統出荷実績（JAおおふなと）
H26:9, 129千円→H28:17, 391千円 ※袷, スナップエンドウ, スッキーニ, ｶﾞｰﾁｬ, ｷｬﾁ合計
- ・ 産直販売実績（JAおおふなと、JAいわて花巻東部）
H26:123, 310千円→H28:156, 075千円（H28は12月末現在の実績）



(4) 栽培管理・農薬適正使用指導 (H27～H28)

ア 冬春等品目の指導会が定着するとともに、各品目の防除暦を作成及び農薬適正使用指導により、農薬が適正に使用されている。



園芸相談会の様子

4. 栽培管理

① 栽培の流れ

平成28年度版 園芸品目組合せ事例

4月上旬 5月上旬 6月上旬 6～7月

園芸準備・播種 追肥・病 収穫・調整・出荷！ 追肥・病

| 品目 | 作型 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 備考 |
|----------|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|--------|
| ホウレンソウ | 露地中 | | | | | | | | | | | | | 2018年産 |
| スナップエンドウ | 露地中 | | | | | | | | | | | | | 2018年産 |
| ホウレンソウ | ハウス中 | | | | | | | | | | | | | 2018年産 |
| スナップエンドウ | ハウス中 | | | | | | | | | | | | | 2018年産 |

作成した栽培マニュアル、品目組合せ事例



以前から気仙地域では、狭小な農地と冬期温暖な気候を活かした農業が行われてきました。当地域では、如何に少ない農地を有効に利用できるか、温暖な気候や品目の組合せによる営農類型で冬春期も多くの収入を得ることができるとを模索してきました。この度の普及センターをはじめとする関係機関の実証結果に基づいた品目の組合せや栽培マニュアルにより、生産性の向上と農業者の所得の向上、園芸振興が図られることに期待をしています。

所属職名：JAおおふなと農産園芸課課長

氏名：菊田勝

■ 協働した機関

JA おおふなと、JA いわて花巻、大船渡地域農業振興協議会、釜石・大槌地域農業振興協議会、農林部、農林振興センター

■ 大船渡農業改良普及センター

園芸経営体育成チーム

(チームリーダー：外館光一、チーム員：新藤雅文、菅野遥奈、小田島裕)

執筆者：小田島裕

水稻新品種「銀河のしずく」の高品質米生産の推進

【宮古農業改良普及センター】

■ 課題名

低コスト安定生産による水田営農の推進

■ ねらい

平成28年度より水稻新品種「銀河のしずく」の一般作付が始まり、宮古地域においても高品質・安定生産へ向けて栽培研究会が組織された。生育状況に応じたきめ細かな栽培実証及び研究会活動の支援を通じて栽培管理技術の向上を図る。

■ 活動対象

「銀河のしずく」作付農家7戸（H28：作付面積2.86ha）

■ 活動経過

(1) 実証圃の設置による栽培特性の把握

標高100m以下の栽培適地に栽培モデル実証圃1ヶ所（宮古市）を設置した。また、適地外の収量・品質の変動を確認するため、高標高地（宮古市）及び栽培適地外（岩泉町）に栽培実証圃を各1ヶ所設置した。

各地域における生育状況を確認するとともに収量、品質等について調査を行った。

(2) 研修会の開催による栽培管理技術の向上

ア 栽培講習会

作付け前に当年産の栽培者を対象とした栽培講習会を開催し、「銀河のしずく」の品種特性や栽培マニュアルに基づいた肥培管理について確認した。

イ 現地研修会

7月7日、モデル実証圃において現地研修会を開催した。研修会では、各実証圃の生育調査結果を参考にしながら現地の生育状況を確認し、実際にSPAD値（葉色）を測定して幼穂形成期の追肥要否について検討した。

ウ 実績検討会

平成28年産「銀河のしずく」の取組みを振り返るため、12月15日に実績検討会を開催した。各実証圃の実績（収量及び品質）について栽培者同士で意見交換し、特に次年度の作付けに向けた施肥体系等を検討した。

(3) 地域栽培研究会の活動支援

J A新しいわて「銀河のしずく」地域栽培研究会宮古支部の設立に伴い、その代表となった農家に対し、同研究会他支部の活動や県研究会の現地研修等への参加を誘導し、栽培管理技術の向上を図った。

■ 活動成果

(1) 安定的な生産体系の確立

ア 出荷実績

管内の作付面積2.86haのうち、台風による土砂流入及び長期冠水の影響で管内3カ所、計0.7haで収穫不能（2ヶ所）や玄米品質の低下（1ヶ所）が生じた。収穫に至った圃場では、玄米品質の向上を意識した肥培管理の徹底により、出荷基準【検査等級1等、玄米タ

ンパク質含有率（乾物換算）7.0%以下】をクリアし、高品質な「銀河のしずく」の出荷に至った。

イ モデル実証圃及び栽培実証圃の調査結果

モデル実証圃では、坪刈り収量525kg/10aを確保した他、品質についても良食味の指標となる玄米中タンパク質含有率（乾物換算）が6.5%と低く、高品質米を生産できた。

栽培実証圃（高標高地）では、栽植密度がやや少なかったため、㎡あたりの茎数・穂数不足により、㎡粒数が減少したこともあり、坪刈り収量は411kg/10aにとどまった。玄米中タンパク質含有率は低く抑えられたが、不稔歩合がやや高まる傾向が確認された。

岩泉町の栽培実証圃（栽培適地外）は、台風10号（平成28年8月30日）の土砂流入等の影響により、栽培継続が不能となった。

平成28年度のモデル実証圃及び栽培実証圃の結果に基づき、次年度以降は栽培適地とされる標高100m以下の地域への作付けを計画することとした。

(2) 取組みの普及・拡大

次年度は、平成28年度の約2倍の作付面積5haが計画されている。



図 現地研修会の様子（宮古市花輪：撮影日7/7）



モデル圃場で県の栽培マニュアルに照らし合わせた追肥の要否の検討等、生産者・J A・普及センターが連携して栽培に取り組んできました。

積極的な意見交換により、生産者同士で高品質・良食味米を作ろうという意識を高めていきたいと思えます。

所属職名：J A新しいわて「銀河のしずく」地域栽培研究会宮古支部代表

長沢農作業受託組合 組合長 氏名：佐々木政司

■ 協働した機関

新岩手農業協同組合宮古営農経済センター、宮古市、山田町、宮古農林振興センター

■ 宮古農業改良普及センター

耕畜連携チーム（チームリーダー：長谷川聡、チーム員：小崎洋平、上出拓海、太田薫）

執筆者：太田薫

外部組織機能強化による地域畜産体制の維持・発展を目指して

【宮古農業改良普及センター】

■ 課題名

自給飼料の生産性向上

■ ねらい

(一社)岩泉農業振興公社(以下「公社」)は、岩泉町大牛内地区および普代村和野山地区で飼料用とうもろこしを栽培・生産し畜産農家へこれを供給するとともに、個別畜産農家飼料畑の収穫・調製作業を受託している。しかし、栽培圃場が遠方に位置していることや農家圃場が小規模で分散していることから、作業効率の向上が課題となっている。また将来、岩泉町で計画されている大規模酪農場および短角繁殖・肥育一貫牧場にかかる、自給粗飼料の生産と供給を公社が担うことが想定されていることから、粗飼料生産量の増加に向けた肥培管理技術の向上も必要である。

そこで、(1)公社における飼料用とうもろこし肥培管理技術のステップアップ、(2)個別畜産農家飼料畑における公社収穫受託作業効率の向上に向けた検討について実施した。

■ 活動対象

(一社)岩泉農業振興公社

■ 活動経過

(1) 公社における飼料用とうもろこし肥培管理技術のステップアップ

ア 現状把握

気象経過の影響はあったが平成26年の飼料用とうもろこし反収は過去最低だった。要因は、堆肥投入量、施肥・播種精度、除草管理など複合的なものと推察。高性能作業機の導入や、除草処理体系の見直しなど栽培体系の再構築を検討するとともに、肥培管理技術の向上を目指した。

イ 課題に応じた支援

(ア) 堆肥投入量増加に向けた誘導

平成26年の投入量は1.5t/10a程度。比較的農閑期で堆肥運搬作業が可能な時期(晩秋および早春)の普代圃場への搬入量増加をアドバイス。

(イ) 施肥・播種作業内容の検討および新技術の導入

施肥量および播種精度の状況を平成26年の作業実績・収量調査等で確認。精度と効率を両立した新たな機械体系として、平成27年に側条施肥播種機の実演展示を普代村和野山地区の公社飼料畑で実施。

(ウ) 土壌処理・生育期処理組合せ調査の実施と新たな除草体系の提案

平成27年に除草剤組合せ調査区を設置(土壌処理3剤×生育期処理2回(5葉期および7葉期)×2反復+部分無処理区3区の合計15区)。調査の結果から、最適と思われる組合せ、散布時期を提案。

(2) 個別畜産農家飼料畑における公社収穫受託作業効率の向上

ア 現状把握

平成21年から個別畜産農家飼料畑の収穫・調製受託作業を実施。収穫には大型機械(6条自走式ハーベスタ)を使用。収穫受託飼料畑は狭小圃場が多く、大型機械の運用は作業

効率上ミスマッチ。また、受託作業面積が拡大傾向にあったため、作業効率の向上による収穫期間延伸の抑制が必要。収穫面積に応じた作業機の新規導入を目指した。

イ 課題に応じた支援

平成25年および平成27年の受託作業実績から現状の作業効率を把握。また、平成27年9月に小圃場対応用として3条刈収穫機の実演展示を岩泉町小川地区で実施し、導入に向けた気運を醸成。

■ 活動成果

(1) 公社における飼料用とうもろこし肥培管理技術のステップアップ

- ア 堆肥搬入量は平成26年晩秋から増加し、平成28年の投入量は約3t/10aと倍増した。
- イ 平成28年に側条施肥播種機を導入。施肥方法を全圃場で側条施肥へ変更、播種精度は95%以上に向上。春作業の工程短縮とともに、施肥・播種作業の高精度化を両立。
- ウ 平成28年から除草体系は土壌処理：エコトップ乳剤→生育期処理：7葉期アルファード液剤に統一。平成26年と比べ、ほぼ全ての雑草種が抑制。

上記ア～ウにより、飼料用とうもろこし反収は大幅に増加（図1）した。（ただし平成28年は台風10号の暴風により倒伏・折損著しく収穫量は調査収量の約50%と大幅な減収）

(2) 個別畜産農家飼料畑における公社収穫受託作業効率の向上

平成28年に3条刈収穫機を新規導入し、収穫作業に供用。台風10号により収穫時の圃場条件は著しく悪化していたものの、受託面積は平成27年：20haから平成28年：22.3haへ2.3ha増加、収穫期間日数は平成27年：18日間から平成28年：16日間へ2日間短縮し、1日当たり作業面積は平成27年：1.1haから平成28年1.4haと増加。単位面積当たり作業時間も平準化され（図2）、圃場面積の大小が作業に及ぼす影響を少なくした。

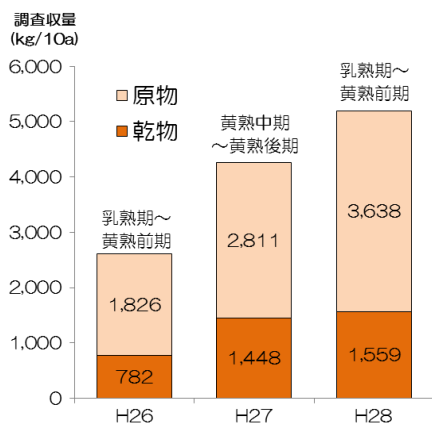


図1 公社普代圃場収量推移(手刈調査)

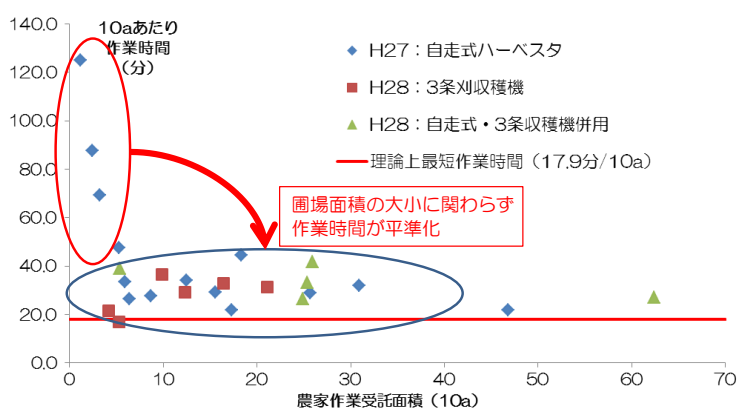


図2 平成27年と平成28年の公社受託作業における単位面積あたり作業時間



肥培管理体系の見直しと各種作業機の導入により、作業効率改善と飼料用とうもろこし生産量増加の両立を実感している。また、受託作業では、圃場面積に応じた収穫体系へ整理されたことで、個別農家の収穫経費が抑えられるという副次的な効果も見られた。今後も更なる粗飼料生産体制の機能拡充に向け、普及センターと連携して取り組んでいきたい。

所属職名：(一社)岩泉農業振興公社 専務理事兼事務局長 氏名：佐々木守

■ 宮古農業改良普及センター

岩泉畜産振興支援チーム（チームリーダー：齋藤浩和、チーム員：高木泰昌、荒谷祐介）

執筆者：荒谷祐介

現場で課題を発見・解決！和牛繁殖農家巡回指導

【中央農業改良普及センター】

■ 課題名

大家畜経営の安定（久慈農業改良普及センター）

■ ねらい

繁殖成績及び子牛育成技術の向上のための技術支援を行い、和牛（黒毛和種）繁殖農家の生産性向上を図る。

■ 活動対象

久慈管内の黒毛和種繁殖農家のうち、重点対象農家10戸

（うち、繁殖成績向上指導対象：5戸、子牛市場価格向上指導対象：5戸）

■ 活動経過

(1) 巡回指導の頻度及び戸数

巡回の頻度は毎月1回、1回あたり対象農家5戸（各対象隔月）の定期巡回指導を実施した。

(2) 対象農家の課題発見

ア 繁殖成績向上指導対象5戸の課題

以下の内容から、分娩間隔の延長を招き、生産性が低下していた。

(ア) 繁殖雌牛の飼料給与不足

妊娠末期から授乳期において、飼料給与量不足がみられ、発情回帰や授精・受胎の遅れの原因になっていた。

(イ) 発情発見が出来ない

繁忙期の発情見逃し、発情周期を把握していない等、牛個体観察が不十分であった。

(ウ) 妊娠鑑定の遅れ

未受胎のまま人工授精していない期間が延びていた事例があった。

イ 子牛市場価格向上指導対象5戸の課題

以下の内容から、子牛の発育不良を招き、子牛販売価格が低かった。

(ア) 疾病罹患による損耗や発育不良

下痢、血便、皮膚病等のため、発育が停滞していた。

(イ) 飼料や水の給与時期の遅れと給与量不足

特に哺乳期の飼料給与量が不足していた。

(ウ) 牛体の汚れ

牛舎環境が悪く、牛体が濡れた状態のため体温が奪われ、発育遅延や免疫の低下を招いていた。

(3) 指導内容

ア 繁殖成績向上指導対象5戸への指導

共通事項として、記帳と、ホワイトボード等による現状の「みえる化」を指導した。

(ア) 繁殖雌牛の飼料給与改善（2戸）

妊娠末期から授乳期の配合飼料給与量を、慣行の約2倍とする実証試験を実施した。

- (イ) 発情発見装置（「牛温恵」）の活用（2戸）
長期空胎牛や発情微弱牛への活用を継続した。
- (ウ) 早期妊娠鑑定の実施
授精後60日以降での鑑定実施から、40日前後で実施するよう指導した。

イ 子牛市場価格向上指導対象5戸への指導

- (ア) 疾病予防（1戸）と早期治療（2戸）
疾病予防のため、石灰乳塗布による牛舎消毒の実証を行った。その他、寄生虫の早期駆除（2戸）、皮膚病の早期治療と予防方法（1戸）について指導を行った。
- (イ) 飼料や飲水の早期給与と給与量増（2戸）
- (ウ) 牛床の清掃と乾燥状態の保持を指導（2戸）



発情発見装置の装着打ち合わせ



石灰乳塗布作業

■ 活動成果

- (1) 繁殖成績向上指導対象の分娩間隔短縮
平成27年度から指導してきた農家4戸では、分娩間隔が6～14日短縮した。
平成28年度から新規対象とした農家を含め、今後も指導を継続していく。
- (2) 子牛市場価格向上指導対象の日齢体重及び日齢単価
日齢体重・日齢単価ともに改善し、同一市場平均比100%以上を達成した対象があった。
一方で、一部疾病罹患により発育不良が見られたため、平均の70%程度にとどまった対象もあった。
指導の継続実施により課題解決の取り組みを強化し、発育向上につなげていく。



毎月、巡回指導に参加しています。

対象を絞って定期的に巡回すること、関係機関と一緒に現地に入ることによって、効果的な指導が来ています。

特に、繁殖状況をホワイトボード等に「みえる化」する習慣をつけていただくと、日常の授精業務や獣医師の診療にも大変役立ちます。

所属職名：新岩手農業協同組合久慈営農経済センター畜産酪農課 授精師 氏名：栢元慎治

■ 協働した機関

J A新しいわて久慈営農経済センター、久慈市、洋野町、県北広域振興局、県北家畜保健衛生所

■ 中央農業改良普及センター軽米普及サブセンター

畜産チーム（チームリーダー：山口直己、チーム員：西田清、米澤智恵美）

執筆者：西田清

ブランドりんご「冬恋」による所得向上

【二戸農業改良普及センター】

- 課題名 果樹のブランド化推進と生産力向上支援
- ねらい りんご生産農家の所得向上のために、ブランドりんご「冬恋」の導入、認知度向上（流通と生産）、品質向上と単価維持、生産拡大に取り組んだ。
- 活動対象 二戸地方のりんご生産者、消費者、流通関係者
- 活動経過

(1) 認知度の向上

ア テレビでのPR

| 月日 | 項目 | 備考 |
|-------------|------------------------|--------------|
| H24. 11. 29 | テレビ岩手 5きげんテレビ | りんご生産者 4名 |
| H25. 11. 21 | Viva わんだふおー17:00-17:05 | りんご生産者 3名 |
| H26. 11. 27 | | りんご生産者 3名 |
| H28. 12. 3 | 東北放送「サタデーウォッチン」 | 藤崎デパートの販売 PR |

イ カシオペアFMラジオでのPR

| 月日 | 項目 | 備考 |
|-------------|-------------------|----------------|
| H25. 12. 10 | 「カシオペア連邦フルーツ物語」 | 冬恋プレゼント FM番組作成 |
| H25. 12. 14 | 二戸えきまつり | 新幹線開業 10周年記念 |
| H26. 12. 9 | りんご「冬恋」について聞いてみよう | 冬恋プレゼント FM番組作成 |

(2) 冬恋収穫体験の開催

| 月日 | 項目 | 備考 |
|-------------|-------------|---------------|
| H25. 11. 30 | 岩手銀河鉄道観光ツアー | モニターツアー事業 14名 |
| H25. 11. 27 | 三八五観光ツアー | モニターツアー事業 20名 |
| H26. 11. 29 | 二戸市の消費者イベント | 二戸市観光協会連携 16名 |
| H26. 11. 30 | 岩手県北観光バスツアー | 自主企画対応 40名 |
| H26. 11. 30 | 岩手銀河鉄道観光ツアー | 地域経営推進費事業 18名 |
| H27. 11. 28 | 川徳友の会 | 地域経営推進費事業 57名 |
| H27. 11. 29 | 岩手銀河鉄道観光ツアー | 自主企画対応 14名 |
| H27. 11. 29 | 二戸市の消費者イベント | 二戸市観光協会連携 13名 |
| H28. 11. 24 | いわて生協 | 地域経営推進費事業 25名 |
| H28. 11. 26 | 川徳友の会 | 地域経営推進費事業 25名 |
| H28. 11. 27 | 岩手銀河鉄道観光 | 自主企画対応 45名 |

(3) PRイベント

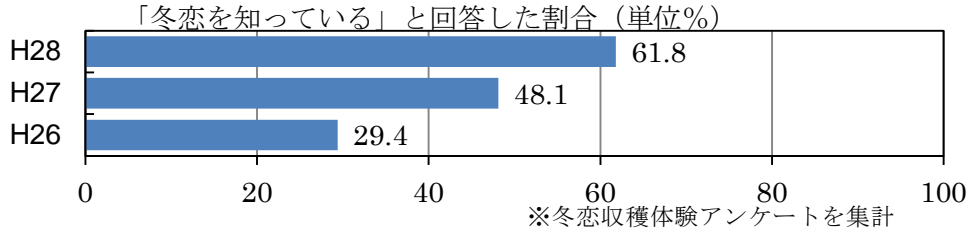
| 月日 | 項目 | 備考 |
|-------------|--------------|----------------------------|
| H24. 7. 8 | フルーツの里宣言 | 二戸地方のブランド果物 PR 開始宣言 |
| H24. 12. 1 | 冬恋キャラバン | 場所：クロステラス・盛岡駅・なにやーと |
| H25. 11. 23 | 冬恋キャラバン | 場所：冬恋キャラバン 川徳、クロステラス |
| H26. 2. 2 | カシオペア連邦菓子まつり | 冬恋ロールケーキ作成 |
| H26. 12. 7 | 冬恋キャラバン | 場所：川徳、クロステラス |
| H27. 12. 5 | 冬恋キャラバン | 場所：川徳、クロステラス |
| H28. 12. 3 | 仙台プロモーション | 試食 PR：藤崎デパート みのりカフェ |
| H28. 12. 4 | 冬恋キャラバン | 場所：川徳、イオン盛岡 |
| H28. 12. 8 | 東京プロモーション | 試食 PR：恵比寿ガーデプレイス 渋谷西村・紀ノ國屋 |

(4) 出荷分析と評価

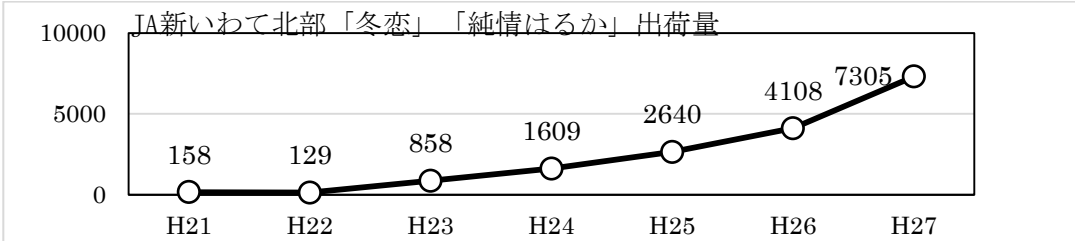
出荷者を対象に、個別の販売分析・評価を行い提供した（H25、H27、H28）。

■ 活動成果

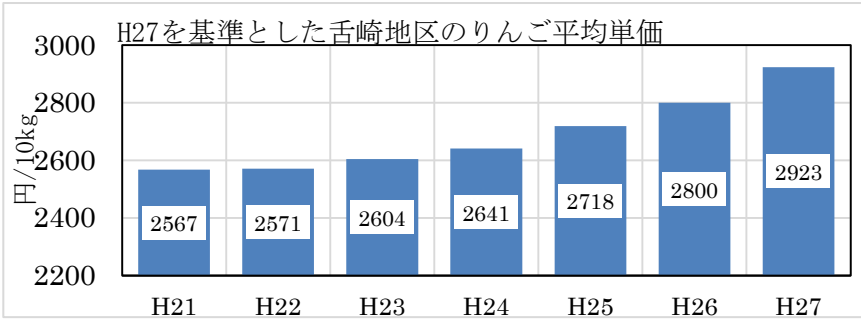
(1) 認知度の向上



(2) 出荷量の増大



(3) 平均単価の向上と所得試算



※単位：10kg ケース数

コメント

H21 (出荷割合 0.1%) と H27 (出荷割合 8.8%) の比較で、単価は 1.14 倍となる。冬恋の 10a 当たりの所得推定金額は、出荷量 1.5t、冬恋率 50% で、約 51 万円。



普及センターの指導により、5年前に「うまい果物の里」をJA前、産直駐車場で消費者を前に宣言した。二戸発のさくらんぼ・ブルーベリー・りんごのブランド化推進のための事業活動支援を振興局より頂き、JA果樹部会と連携して生産活動を強力に実施、同時にマスコミに二戸地域ブランド果物として若者を中心にPR活動を行った。さらに県内消費者を招き入れ果樹園で収穫体験を実施し、うまい果物として認識評価して頂いた。

結果として生産者はりんご「はるか」への更新が拡大し、二戸地域内でのブランド果物の購買が順調に伸び県内一となるべく「夏恋、冬恋、紅いわて、カシオペアサンふじ」の生産量と販売単価を上げるまでとなった。最後に県北広域振興局、関係機関にお礼を申し上げます。

所属職名：二戸地方観光農業振興協議会 会長 氏名：中里久雄

■ 協働した機関 JA全農いわて、JA新しいわて、二戸農林振興センター、二戸地方観光農業推進協議会、二戸市、一戸町、軽米町、九戸村

■ 二戸農業改良普及センター

園芸経営体育成チーム (チームリーダー：佐藤喬、チーム員：久米正明、村上珠利、安久津留奈、戸田沢ひかる、新毛夏美) 執筆者：久米正明

産直の販売力向上に向けた支援

【八幡平農業改良普及センター】

■ 課題名

農村資源を活かしたアグリビジネスの展開による地域活性化

■ ねらい

八幡平地域における有人の産地直売施設（以下、産直という。）の年間販売額は約6億4千万円（H27）で、全体としては年々増加している。一方で販売額が伸び悩んでいる産直もあり、品揃えの不足や組織で運営改善に向けた検討がなされていないといった共通課題が見受けられる。

そこで、販売額が伸び悩んでいる産直の中から、販売額向上に向け運営改善に意欲が高かった「産直りんどうの里」を選定し、運営改善に向けた重点的な支援を行うこととした。

また、産直は食の安全・安心を提供する場でもあることから、その役割を十分果たせるよう管内の産直を対象にした体制作りの支援を行うこととした。

■ 活動対象

産直りんどうの里（八幡平市）、管内の産直19か所

■ 活動経過

(1) 販売額向上に向けた定期的な勉強会、検討会の開催

産直りんどうの里は、H28年度の目標販売額を600万円としており、これに向けて組合員と共に産直の抱える課題を抽出、解決に向けた定期的な勉強会を開催した。

ア 産直りんどうの里の課題

- ・野菜栽培者が少なく、品揃えが不十分
- ・改善に向けた相談がされておらず、当番間の伝達事項も正しく伝わらないことがある
- ・店舗内の雰囲気さびしい、親切なPOPが少ない等、店づくりの工夫が不十分

イ 定期勉強会の内容

| 期日 | 手法 | 具体的内容 | 参加者数 |
|-------------|----------|-----------------------|------|
| H28. 3 | 検討会 | 産直の運営改善に向けた取り組みの合意 | 1人 |
| H28. 4. 25 | 表示の改善研修 | 農繁期に掲示できるPOPの作成 | 5人 |
| H28. 5. 31 | 検討会 | 勉強会の年間スケジュールと内容について確認 | 1人 |
| H28. 7. 4 | 野菜栽培技術研修 | 普及員による秋野菜の栽培管理ポイントの指導 | 8人 |
| H28. 10. 17 | 先進事例研修 | 盛岡市・紫波町内の産直5ヶ所を視察 | 9人 |
| H28. 10. 24 | 検討会 | 先進事例研修の振り返りと改善目標の設定 | 8人 |
| H28. 11. 30 | 検討会 | 改善目標達成のための具体策を検討 | 8人 |
| H28. 12. 16 | 農産加工技術研修 | 組合員による上手な漬物の作り方の指導 | 8人 |
| H29. 2. 17 | 検討会 | 次年度作付け計画の作成と目標販売額の設定 | 6人 |

(2) 安全・安心な食の提供の場としての産直への支援

ア 農薬適正使用の指導と並行した生産履歴記帳の取組推進

食の安全・安心を提供することをねらいとした研修会を開催し、生産履歴記帳の実践産直の事例紹介、記帳を実践している産直と未実施の産直を組み合わせたグループ分けでの情報交換を実施した。

また、管内で農薬残留基準値違反の事案が発生したことから、回収命令が出された商品が出荷されていた2産直に対し個別に支援をし、それぞれの総会の機会に組合員を対象とした講習を実施した。

イ 接客スキルの向上推進

より多くのお客様に来店してもらえるよう、接客マナー、クレーム対応手法、電話対応のポイントをテーマにした研修会を開催し、演習を実施した。

■ 活動成果

(1) 重点対象産直の改善実施と販売額向上

産直りんどうの里への重点的な支援により、次のとおり改善され、H28年度の年間販売額が629万円(前年対比119%)に向上した。

ア 品揃えが充実… 切り花りんどう出荷者が増加(1名)、秋野菜の品質が向上(ほうれんそう、人参、じゃがいも)、冬期の出荷期間が伸びた(ほうれんそう)

イ 組合員の改善に向けた心構えに意気込みが出てきた… 自主企画研修の実施(先進事例研修として、紫波町方面5か所の産直を視察)

ウ 説明付きのPOPが増加、店内ディスプレイの工夫、店舗入口・駐車場入口看板の書き換えによる視認性向上



【秋野菜の栽培管理の指導】



【自主企画研修(先進事例研修)】



【商品の説明を加えたPOP】

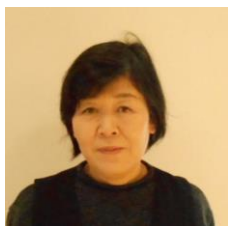
(2) 生産履歴記帳の取組推進

研修会で実践例を紹介したことにより、記帳の取り組みに必要性を感じていなかった産直でも記帳に対する意識が高まった。新たに2産直で、記帳を取り組むこととなった。

個別で支援した2産直のうち1か所は既に記帳を実践していたが、組合員の記帳をより確実なものにしていくこととなった。

(3) 接客スキルの向上

電話やクレーム対応時には間違いがないよう復唱すること等、具体的事例が勉強になった旨の声が多数寄せられた。接客時の言葉遣いに対する配慮は店舗で実践されてきている。



定期的開催した勉強会や検討会は、組合員皆さんの意識と意欲の向上につながって良かった。分かりやすいPOPが商品価値を高めて、販売額向上にもつながったし、店の中が明るくなった。

野菜の栽培計画も立てたので、今後は、計画的に産直に野菜が並ぶことと思う。今後は、勉強会の習慣を継続しながら、新しい課題を見つけて解決できるように前進していきたい。

所属職名：産直りんどうの里 組合長 氏名：宮野佐智子

■ 協働した機関

県央保健所

■ 八幡平農業改良普及センター

担い手経営チーム (チームリーダー：藤澤真澄、チーム員：藤原千穂、菊地雄大)

執筆者：藤原千穂

薬用作物の安定生産に向けた取り組み

【八幡平農業改良普及センター】

■ 課題名

薬用作物の安定生産

■ ねらい

本県では、岩手町に拠点を置く「岩手薬草生産組合」が、古くから大手製薬メーカーと薬用作物の契約栽培を行い、県北地域を中心に産地が形成されている。このことから、本県の薬用作物は先行産地としての優位性や中山間地域の多様な立地特性を活かし、契約栽培による安定収入が見込める有望品目として期待される。

そこで、盛岡広域振興局地域経営推進費を活用し、生育不良要因解析や除草省力化技術の実証により薬用作物の安定生産を目指す。また、新規栽培者掘り起し用パンフレット等の啓発資料の作成・提案により産地力強化を図る。

■ 活動対象

農事組合法人 岩手薬草生産組合

■ 活動経過

- (1) 生産不良要因の解析
岩手県病害虫防除所と連携し、薬用作物の生育不良要因の解析を実施した。
- (2) 除草作業の省力化実証
株間に除草シート（アグリシート）、条間・株間にリビングマルチ（大麦てまいらず）を用いて除草作業の省力化を実証した。
- (3) カノコソウ先進地事例研修（平成 28 年 8 月 3～5 日）
北海道名寄市管内のカノコソウ栽培を視察し、連作障害対策や健全種苗の供給体制について、先進事例調査を行った。
- (4) カノコソウ生産振興研修会（平成 28 年 10 月 4 日）
今回、生育不良要因の解析で判明した半身萎凋病、T S W V の概要および対応策について生産者に周知することを目的に本研修会を開催した（出席者：組合員 15 名、関係機関 9 名）。
- (5) 薬用作物産地振興研修会（平成 29 年 3 月 9 日）
本県の薬用作物の生産等における課題及び解決方策について理解を深め、産地振興を図ることを目的に本研修会を開催した（出席者 組合員 47 名、一般参加者 11 名、関係機関 16 名）。
- (6) 指導啓発資料の作成
栽培管理技術の向上を図るため、生育不良要因として解明した病害を含めた「病害虫図解シート」を作成した。また、新規栽培者の確保を図るため、新規栽培者掘り起し用パンフレット「薬用作物栽培の手引き」を作成した。

■ 活動成果

- (1) 生育不良要因の解析
4 品目において 5 病害の生育不良要因を解析した（表 1）。本取組では、大手製薬メーカーから評価を受け、安定生産に向け、製薬メーカーとの連携体制が構築された。

(2) 除草作業の省力化実証

除草シートについては雑草を抑制し、畦間の除草作業の省力化が図られた。一方、リビングマルチについては抑草効果が低く、条間・株間除草については技術の再構築が必要である。

(3) カノコソウ先進地事例研修

田畑輪換により、半身萎凋病の菌核を湛水状態で死滅させる連作障害対策を研修した。研修で得られた成果に基づき来年度は下記の実証に取り組む予定である。

- ①田畑輪換実証圃：半身萎凋病対策として設置
- ②健全種苗採種圃：健全種苗の生産を実施



田畑輪換の状況
(左:カノコソウ、右:水稲)

(4) カノコソウ生産振興研修会

病虫害防除所から生育不良要因として特定された病害（半身萎凋病、TSWV）の概要について説明した。

また、普及センターから、①健全種苗の使用、②輪作を徹底し、過去に半身萎凋病が発生した畑では栽培しない等の来年度に向けた作付方針について生産者に周知を図った。

(5) 薬用作物産地振興研修会

講演により薬用作物の国内生産の現状の周知を図ると共に、各関係機関（普及、農業研究センター、製薬メーカー）から安定生産位に向けた取組事例を紹介した。

また、普及から「病虫害図解シート」の紹介、新規栽培者の確保に向け作成した「薬用作物栽培の手引き」の配布を行い、組合員等から品目導入の参考になるとの評価を受けている。

表1 解明した生産不良要因

| 薬用作物名 | 症状 | 要因 | 今後の対応 |
|---------|------------------------|--------------------|----------------------------|
| センキュウ | 貯蔵中の種芋に青カビが発生し腐敗する。 | ペニシリウム属菌 | 種芋貯蔵法の確立 |
| カノコソウ | 茎葉の半身が枯れこみ、株全体の枯死に至る。 | 半身萎凋病 | 全種苗採種実証圃設置 田畑輪換栽培実証圃設置 |
| | 葉に黄化、退色症状を呈し、生育不良となる。 | トマト黄化えそウイルス (TSWV) | 健全種苗採種実証圃設置 種芋のウイルスフリー化 |
| オクトリカブト | 地際部に白い菌糸が密生し腐敗、株が倒伏する。 | 白絹病様症状 | 接種試験による菌同定 殺菌剤の登録拡大 |
| シャクヤク | 葉に赤褐色の病斑が発生し、枯死に繋がる。 | 斑葉病 | 多雨年の防除徹底 耐病性系統の選抜 |



薬用作物の国内栽培振興が進むなかで、現地の生産技術は安定生産という基本課題を解決するために一層の努力を要し、関係機関の連携体制が産地拡大のカギとなることは必至です。普及センターには、ご多忙のなか多角的に御指導をいただいております。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

所属職名：農事組合法人 岩手薬草生産組合 総務部長 氏名：伊藤浩史

■ 協働した機関

(農)岩手薬草生産組合、製薬メーカー、岩手町、県病虫害防除所、県農業研究センター

■ 八幡平農業改良普及センター 岩手町駐在

高原野菜チーム (チームリーダー：小原善一、チーム員：千田裕)

執筆者：千田裕

若手女性農業者の掘り起しとネットワークづくり支援

【一関農業改良普及センター】

■ 課題名

新規就農者等の確保と早期経営確立

■ ねらい

農業従事人口が減少する中、その半数以上が女性である現状の中で、管内の45歳未満の女性の新規就農者割合は18%（過去5年平均・一関普及センター調べ）と低い状態である。また、女性農業者向けの各種研修会、組織活動はあるが、若手女性農業者は既存の組織活動への参加意欲が低い。このことは、近隣に同世代の農業者が少なく、日常的に交流できる同じ境遇の仲間を求めていることも一因と考えられる。

そこで、若手女性農業者がゆるやかなネットワークを構築し、多彩な活動が自主的に行われること、また、グループ地域内外の仲間づくりのプラットフォームとなり各々の経営力向上につながることを目的として実施したものの。

■ 活動対象

一関管内の若手女性農業者

■ 活動経過

(1) 平成26年度

ア 農業女子交流セミナーの開催（全4回）

コミュニケーションスキル向上セミナー、先進事例視察研修、「ものづくりなでしこ」との交流会、食の匠を講師とした郷土料理実習

イ 作目チームからの情報収集による若手女性農業者リストの把握

(2) 平成27年度

ア 農業女子セミナーの開催（全6回）

先進事例視察研修、プロジェクト活動検討、ライフプラン作成、名刺づくり

イ 雑誌掲載による情報発信（月刊誌エリア13回）

(3) 平成28年度

ア いちのせき農業女子交流セミナーの開催（全3回）

先進事例視察研修、若手女性グループとの交流、調理実習、食文化（もち食）の学習

イ 県南農業女子プロジェクト「Galuzu cRew」（ガルズクルー）の結成・活動支援

活動テーマを「販売力の向上と農業の魅力発信」とし、メンバー間のコラボ商品開発・イベントへの出店・メンバーの圃場巡回・情報発信ツール（パンフレット、オリジナルロゴ、オリジナルTシャツ）の作成・視察研修を支援。メンバー8名。

■ 活動成果

(1) 若手女性農業者のゆるやかなネットワーク形成

セミナー参加者同士で連絡先を交換し、互いに情報交換するゆるやかなネットワークが形成されるよう誘導した。

(2) 共通の目的をもったプロジェクトチームの結成

セミナー参加者の中から、有志で、プロジェクトチーム「Galuzu cRew」が結成され

た。イベント出店では、初めて対面販売を行うメンバーの実践の場となるとともに、4Hクラブ員等の合同出店したメンバーと農産物の販路などについて情報交換できた。

また、セミナー等の会場になった飲食店と農産物や加工品の取引や、他地域の農業女子グループの交流会に参加するなど、ネットワークの輪が広がっている。

今後も、今回結成されたグループが核となり、仲間づくりや農業の魅力を発信するプラットフォームとしての活動展開が期待される。



いちのせき農業女子交流セミナー第3回：グループ活動10年目の若手女性農業者を講師に、米粉シフォンケーキの調理実習と活動紹介・交流を実施



Galuzu cRewメンバー圃場巡回：作目が異なるメンバー同士、自分の経営について人に説明する良い機会になった。



地元の農業祭などで、自分達がアイデアを出し合い、作った物を販売して、お客さんに喜ばれ、ガルズクルーをアピールするいい機会が出来ました。また、視察研修や地元の青年農業者、農業農村指導士の方々とも情報交換ができ、参考になりました。

今後は、仲間を増やし、女子力を活かして、商品開発など活動して行きたいと思います。

所属職名：県南農業女子プロジェクト「Galuzu cRew」 氏名：藤森ゆか

■ 協働した機関

一関市、平泉町、一関農林振興センター、一関地方農林業振興協議会

■ 一関農業改良普及センター

担い手・農村活性化チーム

(チームリーダー：千葉守、チーム員：東海林豊、村田就治、氏橋明子) 執筆者：氏橋明子

産地直売所の運営改善の推進

【久慈農業改良普及センター】

■ 課題名

アグリビジネスの推進（産地直売所の販売額向上）

■ ねらい

久慈管内には、20ヵ所の産地直売所（以下：産直）があり、新鮮で安全・安心な農産物を求める消費者ニーズとも相まって販売額は増加傾向である。一方、産直が今後も継続的に発展するためには、品揃えの充実、店舗環境・接客などの運営改善を通じて、顧客満足度の向上を図る必要がある、これら改善の活動を主体的に行う産直の育成が課題となっていた。

普及センターでは、平成24～26年度に「北いわて“ガチンコ”産直甲子園」（以下：産直甲子園）を開催し、各産直における課題を抽出し、改善計画の作成・実践を支援してきたが、販売促進や顧客管理、品揃えの充実などについての専門的知識やノウハウの不足により改善は不十分であった。そこで、平成27年度より専門的知識とノウハウを有する民間アドバイザーと協働し、主体的に運営改善を行う産直の育成に取り組んだ。

■ 活動対象

- ・ 産直甲子園で改善計画を作成した6産直（産直まちなか、産直ショップ花野果、大野ふるさと物産館、ゆうきセンター、産直ぱあふる、スマイル直売所）。
- ・ モデル産直1産直/年（平成27年度：スマイル直売所、平成28年度：産直まちなか）。

■ 活動経過

全国で産直運営指導の実績のある(有)ベネットの青木隆夫氏に民間アドバイザーを依頼し、二戸地域も含めた県北広域で支援を実施することとした。また、主体的に運営改善を実施する産直を育成するためにモデル産直を選定し、改善の実行性を高めるため改善費用の一部を助成した。なお、民間アドバイザーへの謝礼やモデル産直への助成については、県北広域振興局農政部が県単独事業「地域経営推進費」により予算を確保した。

(1) 改善計画のブラッシュアップと実施（6月）

アドバイザーが改善計画の改善手法について指導、普及は指導結果を各産直と共有したうえで、改善計画への反映と改善の取り組みについてフォローアップした。

(2) モデル産直の改善実証支援（6～12月）

ア 改善計画の共有（6月）

改善計画の内容や進め方について理事や事務局と共有したうえで、理事会での合意形成・進捗管理を誘導した。

イ 改善計画の実施（6～12月）

理事会や事務局に改善計画の進捗管理や進め方について助言を行い、着実に改善計画が実施されるよう誘導した。

また、秋冬期の野菜不足対策として、新品目の栽培指導等を実施した。



【ブラッシュアップ研修会】
アドバイザー（左）が指導



【モデル産直の改善実証】
会長等と計画を共有・合意形成

- (3) 取り組みの評価（1～2月）
改善成果発表会を開催し、モデル産直等の改善手法・成果を発表することで、取り組みの評価と成果の波及を図った。
- (4) 改善計画の見直し（3～4月）
各産直における改善計画の達成状況や残された課題並びに他の産直の改善事例を踏まえ、改善計画の見直し（次年度の改善計画の作成）を支援した。



【改善成果発表会】

■ 活動成果

- (1) 各産直とも改善のノウハウやポイントを習得し、主体的な運営改善が定着し、販売額も伸びてきている。なお、平成28年度は台風10号の被害があったものの、これらの取り組みもあり、管内産直合計では概ね前年並みとなる見込みである。
- (2) モデル産直のスマイル直売所では、会員皆で運営改善に取り組む姿勢が見られ、また、改善成果が出たことが励みとなって、積極的な取り組みを継続している。また、産直まちなかでは、野菜部会の設立により事務局と会員の連携が強化されるとともに、生産や出荷に対する意識の改善が見られた。

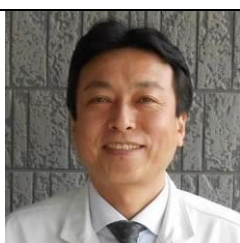
【モデル産直での取り組み状況①：スマイル直売所（野田村）】

| 課題 | 改善計画 | 改善結果 |
|--------------|-----------|---------|
| 1 場所がわかりづらい | 看板・案内板の設置 | 来客数が増加 |
| 2 店内が煩雑としている | バックヤードの設置 | 店内が整理整頓 |
| 3 商品が不足している | 新品目野菜栽培 | 品目数が増加 |

【モデル産直での取り組み状況②：産直まちなか（久慈市）】

| 課題 | 改善計画 | 改善結果 |
|--------------|-------------|--------------|
| 1 生産者との連携不足 | 野菜部会の設立 | 部会を開催、連携強化 |
| 2 秋冬期の野菜不足 | 新品目野菜栽培 | 秋冬期の野菜出荷量が増加 |
| 3 生産履歴提出率の低下 | 様式改善と提出環境整備 | 生産履歴提出率が向上 |
| 4 安売りの傾向 | 目安価格の設定 | 会員が価格を思索 |

- (3) 改善成果発表会で手法や成果を共有することで、運営改善に取り組む産直が増加した。また、モデル産直を参考に新品目野菜栽培に取り組む産直が増加した。
- (4) 今後はモデル産直の改善手法等の波及を図りながら更なる運営改善の取り組みを支援する。



生産者の収益アップをテーマにさまざまな改善に取り組みました。秋冬は野菜の端境期ですが、改善を通じて販売額を増加させることが出来ました。また、会員やスタッフの意識にも変化があり、農薬や商品の価格について学ぼうという姿勢が見られています。今後もアドバイザーや普及センターの指導を仰ぎながら、集客対策や顧客調査に取り組み、更なる運営改善を進めていきたいと考えています。

所属職名：産直まちなか事務局 氏名：中塚匡志

■ 協働した機関

久慈地域産直連絡協議会、有限会社ベネット、県北広域振興局農政部

■ 久慈農業改良普及センター

農村活性化チーム（チームリーダー：佐藤真澄、チーム員：田口礼人、千田聡実）

産地育成チーム（菊池絃子、佐藤聡太）

執筆者：田口礼人

産直活動活性化支援

【二戸農業改良普及センター】

■ 課題名

所得向上に向けた6次産業化支援

■ ねらい

現在の産直の現状としては、県庁流通課の調査では販売額が年々増加しているが、産直の数自体も増加しており、個々の産直としては必ずしも販売額が増加しておらず、停滞気味の産直もある。しかしながら、産直は農家所得の向上、地域活性化に大きな役割を担っているため、産直支援は重要な課題である。

そこで、産直の売上拡大を目的に、産直ごとの課題を抽出して改善するためのアドバイザー派遣、および運営改善についてモデル的な取り組みを行う産直を支援し、その結果を地域の産直全体に波及させる運営改善実証について取組んだ。

■ 活動対象

管内産直施設

■ 活動経過

(1) PDCAサイクルを利用した運営改善シート作成誘導

平成27年度より実施している標記シートの作成を他の産直でも導入するよう、カシオペア産直施設連絡協議会代表者会議、総会などの機会に呼びかけ、また、個別誘導を行った。

(2) アドバイザー派遣

有限会社ベネット代表取締役の青木隆夫氏（直売所甲子園実行委員会事務局）をアドバイザーとして依頼し、運営改善シートを作成した産直を実際に見ていただき、改善方法のアドバイスや気づいた点などを指摘し、改善方法などの提案などをしていただいた。また、当日のアドバイス状況のメモを各産直へ後日配付し、産直内でアドバイス内容の共有化ができるように支援した。

ア 第1回目（H28. 6. 17）

運営改善シートを作成した5産直を訪問指導し、運営改善シートの内容確認とそれについてのアドバイス、及びその他気づいた点についてアドバイスを行った。

イ 第2回目（H28. 9. 9）

運営改善シートを作成した5産直を訪問指導し、運営改善シートの進捗状況の確認と、産直から特に要望のあった事項（POP作成や店内レイアウト等）を中心にアドバイスを行った。また、運営改善実証産直に対し重点的にアドバイスを行った。

ウ 第3回目（H29. 1. 24）

運営改善実証産直の改善状況の確認とアドバイスを行った。

(3) 運営改善実証

販売力の向上と運営力の強化を進めるため、他の産地直売所のモデルとなる改善手法を実証し、その成果を発表し運営改善成果を波及させることを目的に実施した。実証産直は公募で決定し、運営改善のための資材等の購入について支援を行った。また、運営改善が進むように資材の紹介やアドバイザーの助言内容についてのアドバイス等、支援を行った。

(4) 運営改善成果発表会 (H29. 1. 24)

二戸、久慈管内の産直を対象に、運営改善実証の成果発表、青木アドバイザーの講演および参加産直同士の意見交換を行った。

■ 活動成果

(1) アドバイザー派遣

自分たちでは気がつかなかったこと（陳列の仕方、POPなど掲示の仕方、組織体制など）についても改善の余地があることが理解された。また、アドバイザーの助言により改善を実施した産直の中には、産直としてすごく良くなったと実感するようになり、実際に売上が伸びた産直もあった。また、他の産直の事例を数多く紹介してもらい、改善に向けての意欲が高まった。しかし、運営改善シートを作成した産直が5産直にとどまったので、今後はさらに多くの産直に働きかけ運営改善シートを作成し、改善に向けて支援をしていきたい。

(2) 運営改善実証

アドバイザーの助言をもとに実証を行い、実際に来客数、売上とも増加した。簡単にできる部分もあるので、他の産直にも改善手法を波及させたい。

(3) 運営改善成果発表会

運営改善成果発表では、同じ地域の産直がどうやって課題を抽出して、どのように改善したかを知ることができたので、自分たちも見習いたいと運営改善に向けた意欲が高まった。

青木アドバイザーの講演では、全国の産直の動向、二戸・久慈地域の産直の特徴や方向性について紹介があり、産直の運営方向について考えるきっかけとなった。また、参加産直相互の意見交換により、同じ悩みを持っていたり、他の産直の良い取り組み事例を知ることができ、運営改善を行う機運が高まった。しかし、二戸管内の産直で発表会に参加したのは6産直のみで、発表会での波及効果は全産直には及ばなかった。今後ともこのような機会に多くの産直が参加するように働きかけを行うと共に、自分たちも改善に取り組んでみたいと思わせるような成功事例を作るため今後も引き続き支援をしていく。



アドバイザーより助言を受けている様子



運営改善実証についての助言の様子

■ 協働した機関

二戸地方農林水産振興協議会、久慈地方農業農村活性化推進協議会、カシオペア産直施設連絡協議会

■ 二戸農業改良普及センター

担い手・農村起業チーム（チームリーダー：昆野善孝、チーム員：高橋寿夫、富田典子）
執筆者：富田典子